

## 分析派 作者の目から

二場面は、普通に書けばいいところを何かに例えたり、実際にないような表現をしたりして、よりリアルに物語を伝え、頭の中で膨らむような書き方をしている。「熱情」をもとに激しい欲望や微妙な喜びを詳しく書いて、「僕」の気持ちが濃く分かる。普通に読むと分からないが、じっくり読むといろいろなところに作者の仕掛けがあつて、読者の心をつかんでいる。

赤堀名美香さん

微妙な喜びと激しい欲望やちようの細かい部分を書くことで、「僕」のちように対する気持ちをよく表している。

川部靖弘さん

「僕」の気持ちは、歓喜、熱情、欲望、緊張など、多くの気持ちがあり、自分よりちようを優先していることから、ちよう集めに対する多くの思いをよく考えさせることで、作者は分からせようとしていた。

奥村壮太さん

「僕」は、とてもちようを捕ることに熱中していたことが分かる。しかも、使用してある言葉が「ひどく」や「すつぽかす」など、ものすごく熱中していたと分かる言葉がたくさんある。後半は、熱情についてこみ上げてくるものを、自然の細かいところやちようの細かいところなどを書いて、気持ちへつなげている。ヘルマン・ヘッセはとてもすごい。何より、文のつなげ方、もつていき方がとてもうまい。

伊藤雄一朗さん

## 分析派 「僕」の立場から

この場面には、「僕」のちよう集めに対する気持ち、捕らえるときの思いが表されている。自分のことよりもちようを優先し、ちようを捕らえるときは、熱情という気持ちが表れている。何とも言えないようなその時の気持ちがこの場面には表されている。

長屋未来さん



→ 手乗りチョウチョというものがあります。

「僕」には、食事になんか帰らないや、ほかのことをすつぽかすことをしてまでちようを捕まえに行くほど、ちように対する熱情があつた。その熱情の中に「僕」の気持ちには、歓喜、欲望、緊張の三つがあつた。

吉田沙季さん

この場面には、「僕」がちよう集めにとっても夢中だったことと、その夢中になってしまふ理由が書かれている。「ほかのことをすつぽかして」までちよう集めに夢中になっている「僕」が分かる。

井上智元さん

「ひどく心を打ち込んで」の「ひどく」や「ほかのことをすつぽかす」や「耳に入らない」などの表現から、ちよう集めに夢中になっていることが分かる。

道家万智さん

## 感想派

この子は、学校や食事をすつぽかしてまでちよう集めをやっていたので、それほどちよう集めのとりこになっていたんだと分かります。

小笠原百野さん

ちように心を奪われてしまったところがすごく分かりました。だけど、心を奪われすぎて、勉強などやらないことから、みんなやめさせようとするのが、私も共感できました。

高橋依央さん

## 折衷派

作者は、「僕」の感じた熱情を細かく表しているの、より熱中しているのが分かった。だから、欲とかが生まれてくるし、大人になっても感じるのだと分かった。

小河諒花さん

